NIHONJIN NO WASUREMONO

日本人の忘れもの

第2部 忘＝筆 森 清範 清水寺貫主 35

言葉

対談

言葉を見つけるとは、思いを発見すること

自分の言葉を探しながら話すこと考えて

永田和宏氏
京都産業大総合生命科学部教授

鷲田清一氏
大谷大文学部教授・元大阪大総長

永田◉最近のケータイやタブレット型端末には、よく使う言葉を優先的に表示してくれる「予測変換」機能が搭載されています。「あ」と入力するだけで「ありがとう」と出るのでとても便利ですよね。しかし、これは怖いことで、新しい表現を工夫したり、新しい言葉を覚えることもなく、語彙がどんどん貧しくなりそうです。

鷲田◉女子中高生を中心に生み出される新語・流行語はメディアも追いつけないほどの勢いですが、大人には解読不能なものが少なくありません。今の日本社会では政治家も経済人も芸能界の人たちも自分たちの話が通じる域内の相手とだけ話し、それ以外の人とのコミュニケーションなど初めから念頭にないように思えてなりません。

永田◉最近の学生同士の会話を聞いていても同意を求める内容がほとんどだという気がします。私たちの学生時代のように教員と議論しようという学生も少なくなりました。自分と相手とが違うと考えを持っているというのが本当は一番おもしろい筈なのですが、自分が相手と違っていないということに安心したいのかもしれない。これだと対話を通じて深くお互いを理解したり影響を与え合ったりする機会もなくなってしまいます。

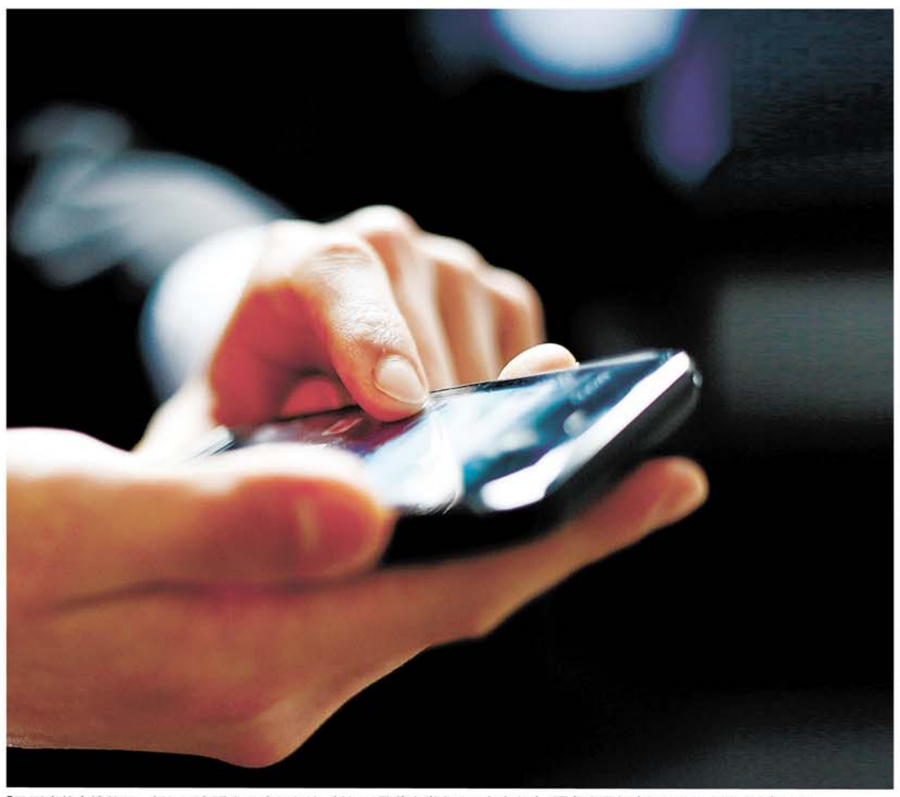
鷲田◉学生に自分をアピールするプレゼンテーションをさせると、よどみなく話すその口調には、ざらついたところ、ひっかかるところがなく、まるで書き言葉を聴いているような気になることがあります。しょせんゲームだと割り切っているのか、それとも思いをそのまま伝えることになにか怯えを感じているのか…。

永田◉私たちが「言いたいことがうまく言えない」と言うときは未熟だから言葉が見つからないのだと思っていますが、自分が言いたいことを探している過程であることが多いようです。短歌の場合、31文字という詩型に収めようと、ああでもないこうでもないと考えるうちに、硬直した言葉がほぐれ、立ってくるような気がします。それまで気付かなかった考えや思いが出てくる面白みが、私に40年以上も短歌を続けさせているのだと思います。

鷲田◉言葉を見つけるというのは、ある意味、思いを発見することですからね。私も講演では事前に決めた骨格に沿って話しますが、授業では学生の反応を見ながら変えていくので着地点が見えません。時には結論が出ないこともありますが、それ自体が教育になると私は考えています。語りかける宛先も決めずにどうやって自分の思いを表現できるのでしょうか。短歌でも歌謡曲でも言葉はもともと他者に宛てたメッセージではなかったかと思います。訴えとか懇願、なんとしても説得したいという思いに裏打ちされていない言葉は上滑りするばかりです。

永田◉わが家はいつのまにか家族全員が歌を詠む家になってしまいました。

本当に大事なことはなかなか伝えられないものです。しかし、型があることで自分の思いを却って素直に言うことができるのですね。彼女が亡くなって、残された歌が私たち家族を支えてくれているという側面が確かにあります。若い人たちにも、ぜひ自分の言葉を探しながら、話をするということを考えて欲しいと思いますね。



「予測変換」機能は、新しい表現を工夫したり、新しい言葉を覚えることもなく、語彙を貧しくさせているのではないか。

戦後、日本人は物の豊かさと引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千年の都・京都から温故知新の知恵を発信する。(毎週日曜日に掲載します)

面と向かって話をしなくても、なんとなく互いの近況や思いを理解している気がします。一昨年妻の河野裕子が乳がんで亡くなりましたが、彼女は死の前日まで歌を作っていました。そこには、家族への思いをなんとか伝えたい、残したいという強い思いがあったと思います。

長生きして欲しいだれかれ数へつつ
つひにはあなたひとりを数ふ

河野裕子

◉ながた・かずひろ
1947年、滋賀県生まれ。京都大理学部卒。京都大再生医科学研究所教授を経て、現職。大学在学中に本格的に短歌を始め、芸術選奨文部科学大臣賞や斎藤茂吉短歌文学賞など受賞多数。2009年、紫綬褒章。短歌結社「塔」主宰。近著に「近代秀歌」など。

◉わしだ・きよかず
1949年、京都市生まれ。京都大文学部卒。大阪大教授、総長を経て、現職。哲学を専門とし、文化批評にも取り組む。サントリー学芸賞、読売文学賞、桑原武夫学芸賞。2004年、紫綬褒章。近著に「大事なものは見えにくい」など。

きょうの季寄せ(二月)

鶯の
来鳴く日々
是好日

安藤和風

「日々是好日」この慣用句は「碧巌録」にあるそうだ。毎日毎日が平和なよい日、それにふさわしいあり様が作者にとって「鶯の来鳴く」ことである。「笹鳴き」は鶯の舌打ちをするような冬の鳴き方である。

今日は旧暦の1月15日、小正月である。従って今年は「年内立春」であった。和風は「元日を地球が廻る元日も」と気宇の大きな句を残す。

(文・岩城久治)

「きょうの心伝て」35

KOKORO DUTE

京ことば

佐々木 義雄
(京都市伏見区/79歳)

私が北海道の片田舎から、この京都へやってきて60年以上になる。その間、数限りない京ことばを聞かせてもらってきたが、その中で私には決して忘れられない京ことばが、3つある。

その1つ目は「おはようお帰りやす」。朝学校へ行こうと思い下宿のおばさんに「行ってきます」と挨拶したところ、おばさんが返してくれた言葉。2つ目は「またおいない」。学生生活もようやく慣れ、行きつけの喫茶店の帰りがけに、女性店員が掛けてくれたもの。そして3つ目の言葉は、「おきばりやす」だ。私が2年前まで一人で自営業をやっていたころ。得意先の社長さんが街で出会うと、決まって私に掛けてくれたものである。

これらの言葉を通して、私は京都人の優しい心に触れたような気がしていた。今もこんな言葉は京都人の間で使われているのであろうか。この3つの言葉を思い出すたびに、私のまぶたの奥には3人の顔が走馬灯のように浮かび上がってくる。

「きょうの心伝て」募集

◉あなたの思う「日本人の忘れもの」は何ですか? 暮らしの中で忘れてはならないと思う日本人の心の系譜や、伝えたい京都に残る心遣いなどをお寄せ下さい。京都新聞社で選考、添削する場合があります。原稿は返却いたしません。タイトル(12文字以内)と本文(400文字以内)、郵便番号、住所、氏名(匿名は不可)、職業、年齢、電話番号を明記し、〒604-8577 京都新聞COM「きょうの心伝て」係まで。
Fax:075-222-2200
E-mail:wasuremono@mb.kyoto-np.co.jp

◉「日本人の忘れもの 第2部」のバックナンバーは、京都新聞ホームページでご覧いただけます。
http://kyoto-np.jp/kp/kyo_np/info/nwc/